

文の多様性による言語発達評価法の開発 I: 基礎データの構築

大阪芸術大学 初等芸術教育学科 教授 田中 裕美子

【はじめに】

ことばは子どもの発達のバロメーターと言われ、ことばの発達の問題は長期的に子どもの成長に負の影響を及ぼすため、早期発見・介入が望ましい。知的遅れや対人関係の問題などがないのにことばが遅れている2歳児は、遅れが個人差の範囲内であり経過観察で良いのか、言語発達障害のリスクとして早期介入が必要なかを判断する必要がある。本研究の目的は、米国で提唱されている sentence diversity による早期言語発達評価法を日本語の言語学的特徴を踏まえて改良し「日本語版 文の多様性(sentence diversity)による早期言語発達評価法」として開発することである。本評価法は観察から得られた子どもの文表出を数えて集計するだけでよいため非常に簡便であり、保健センターや相談機関において言語聴覚士以外の担当者が使用しやすい。具体的には、子どもが30分間に表出した自発話における「名詞と動詞の異なる組み合わせ数: 文の多様性」を算出することで、子どもの言語発達段階を推定する。今回、月齢30ヶ月の定型発達児および言語発達年齢が同程度の言語発達障害児に本評価を実施し比較した。

【方法】

1. 対象者

①定型発達児 埼玉県、大阪府、千葉県に在住する30ヶ月の幼児とその保護者に対し、ソーシャルネットワークサービス等を活用し、協力者の募集を行った。応募者に対して電話等で事前問診を実施し、2語文以上の音声表出があること、難聴や脳性麻痺など言語発達を阻害するような基礎疾患や発達障害等の診断がないこと、日本語の言語環境で養育されていることの確認を行ない、それらを満たす21名(男児9名、女児12名)を対象とし、月齢30ヶ月のタイミングで評価を実施した。

②言語発達障害児 A(5歳1ヶ月、女児)、B(4歳0ヶ月、男児)、C(6歳7ヶ月、女児)を対象とした。3名ともD病院にて言語聴覚士による指導を受けており、2語文以上の表出があり、標準化された言語発達検査で2歳台の言語発達があることを確認した。

2. 発話データの収集および標準化検査の実施

個室にて保護者と子ども1対1で自由に遊んでもらい、その様子を30分間録音した。録音はタブレット(iPad)もしくはボイスレコーダーを使用した。全ての親子で統一した玩具を使用した。定型発達児に対しては知能検査のWPPSIを実施した。

3. 発話データの分析

録音データから、子どもの自発話を文字に書き起こした。不明瞭で同定不可能な発話、保護者の発話の模倣、自己反復、無意味な発声は分析から除外し、文での表出のみを対象とした。本研究における文とは、日本語文法の解釈に従い「名詞+述語」の組み合わせと定義した。さらに、文を述語の種類から名詞文、形容詞文、状態動詞文、動態動詞文に分類し、動態動詞文における「名詞+動詞」

の異なる組み合わせ数(文の多様性)を算出した。

【結果】

1. 定型発達30ヶ月児に認められる文の多様性

定型発達児(n=21)の文の多様性の平均は 19.5 ± 10.7 であったが、男児(n=9) 14.7 ± 8.6 、女児(n=12) 23.1 ± 10.7 と女児の方が多く、統計的にも有意差を認めた $t(19) = -1.84, p < .05$ 。また、出生順で比較すると、第1子と第2子以降では、第1子(n=12)の文の多様性 20.6 ± 9.5 、第2子以降(n=9)文の多様性 18.0 ± 12.0 であり、第1子の方が多いが統計的な有意差はみられなかった。さらに、養育環境として家庭で養育されている児と保育所を利用している児を比較したところ、家庭養育児(n=12)文の多様性 25.5 ± 9.0 、保育所利用児(n=9)文の多様性 13.8 ± 8.6 であり、統計的にも有意差が認められた $t(19) = 3.73, p < 0.01$ 。

このように、2歳6ヶ月児の定型発達児の言語発達を文の多様性から検討すると、性別や養育環境による有意差が認められた。また、標準化知能検査による知能の違いは、養育環境のみであり、家庭養育児の方が保育利用児より高かった。

2. 言語発達障害児の分析

A児(5歳1ヶ月)は言語・コミュニケーションスケール(LCスケール)にて総合言語発達年齢2歳9ヶ月で、文の多様性は6であった。B児(4歳0ヶ月)はマッカーサー乳幼児言語発達質問紙(MCDI)にて表出語彙が2歳8ヶ月相当で、文の多様性は5であった。C児(6歳7ヶ月)は、LCスケール総合言語発達年齢2歳3ヶ月で、MCDI表出語彙が2歳6ヶ月相当で、文の多様性1であった。3名とも既存の言語発達検査では言語表出レベルが30ヶ月前後であったが、文の多様性は月齢30ヶ月の定型発達児の平均値と比較して明らかに少ない結果となった。

【考察】

文の多様性から見た生後30ヶ月の言語発達は、男児よりも女児の方が、保育所利用児よりも家庭養育児の方が進んでいることが示された。出生順による差は認められなかったが、従来からことばの発達が早いと経験的に言われてきたことが文の多様性の豊かさで示された。また、3名の言語発達障害児の文の多様性は、言語発達年齢が同程度の定型発達児と比較して顕著に少なかった。この結果は、文の多様性の分析により、既存の標準化検査では評価できなかった言語発達障害児の文構築能力の障害を浮き彫りにできることを示唆している。

【まとめ】

今回、2歳6ヶ月定型発達児の文多様性の発達様相や言語発達障害児の文構築能力の障害が明らかになり、文の多様性による評価は、既存の言語検査では測ることができない文構築能力について評価でき、ことばの遅れの早期発見ツールとして有用であることが示唆された。本評価法を実用化するために、今後さらにデータを補強し発達標準値を作成することを目指す。